

「私たちで作る防波堤」

千葉市立川戸中学校 3 年 地頭園 志織

私たちの住んでいる日本は、地震や台風、豪雨などの自然災害がとても多い国だ。毎年のようにどこかで大きな被害が起こり、多くの人が避難生活を強いられている。ニュースでその様子を見るたびに、「もし自分の住む地域で同じことが起きたらどうなるだろう」と考える。災害は、いつ、どこで、誰の身にふりかかるか分からない。だからこそ、私たち一人一人に直接関係のある問題だと思う。

被害を受けた地域には、すぐに仮設住宅が建てられ、道路や電気、水道も復旧が進む。その背景にあるのは私たちが納める税金だ。例えば、二〇一一年の東日本大震災では復興費用が約十兆円に上ったといわれる。また、それに加えて東北三県に復興のために使われる「復興特別所得税」は、年間約四千億円が集められ、被災地の復興に充てられている。この税は二〇三七年まで続く予定で、長い時間をかけて被災地を支える仕組みとなっている。もし税金がなければ、これほど大規模な復興を実現することは難しかっただろう。

私は、税金を「私たちで作る防波堤」だと考える。防波堤は、一人の力で作ることができない。多くの人が少しずつ石や土を積み上げることで、初めて大きな壁になる。税金もそれと同じで、一人一人が少しずつ納めることで、社会全体を守る大きな力になる。普段は意識しないけれど、災害や困難が起きたときにこそ、その力を発揮して私たちを守ってくれる防波堤となるのだ。

さらに、税金の支えは自分の町だけにとどまらない。遠く離れた地域で起きた災害に対しても全国から集められた税金が使われる。例えば、二〇二〇年に九州で起きた豪雨では被害額が約六千億円にのぼり、二〇一八年の西日本豪雨では被害総額が一兆九百億に達した。こうした大きな被害に対しても、税金が投入されて人々の生活が支えられてきた。私はそのニュースを見て、会ったことのない人たち同士が税金という「防波堤」を作る仲間になっているのだと実感した。

税金というと、「ただお金を取られている」というようなマイナスのイメージを持つ人もいるかもしれない。私自身も、以前はそう思っていた。しかし、災害のニュースを見て、沢山の人の生活が税金によって守られていることを知り、考えが変わった。税金は決して無駄に取られているお金ではない。社会を支えるのに必要な「私たちで作る防波堤」なのだ。

私も、将来税金を納めることになる。自分が困ったときに、誰かが納めた税金で守られるとしたらそのありがたみを強く感じるだろう。だからこそ、自分も誰かのために防波堤を作る側になりたいと思う。税金を納めることは、社会の一員として大切な責任であり、誇りでもあるのだ。税金はこれからも必要とされ続けるだろう。税金とどう向き合い、社会を守っていくか考えていきたいと思う。